



Title	低温センターにお世話になって
Author(s)	齋藤, 一弥
Citation	大阪大学低温センター 50周年記念誌. 2025, p. 40-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/102109
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

低温センターにお世話になって

筑波大学名誉教授 齋藤 一弥
低温センターだより編集委員

私が低温センター2階の実験室に出入りするようになったのは、理学部化学科の千原秀昭先生の研究室に卒業研究で配属になった1980年の春で、学位取得の1986年3月(正確には、直接指導をいただいた阿竹徹先生の東工大異動に伴い東工大で居候するようになる1985年2月の前)まで、「低温2階」の実験室で分子結晶の熱容量測定を行いました。その後、都立大での勤務を経て、徂徠道夫センター長のお声かけで理学研究科附属マイクロ熱研究センターに1995年12月に赴任し、2004年3月に筑波大へ異動するまで、継続的に低温センターには大変お世話になりました。通算すると約15年間になります。

卒業研究を始めた当初は、液体ヘリウムや液体水素(!)を寒剤に使う温度領域では熱容量の温度依存性が大きく、測定の設定を手で変更する必要があるため徹夜は必須。液体窒素温度以上では設定変更の頻度が小さくなるものの、1時間に1回程度は手を加える必要があり、やはり徹夜が必要でした。測定室が共用になっていた菅研究室のオーバードクターと何度も一緒に徹夜をしたことを鮮明に覚えています。その後、阿竹先生と、液体窒素の補充以外を(ほぼ)自動化して、測定がずいぶん楽になりました(このときに BASIC でかいた測定プログラムは、ほぼそのまま、現在も使われています)。

マイクロ熱研究センターに赴任後は低温センターだよりの編集委員もさせていただき、記事集めのお手伝いをしました。編集委員会には寒剤を使う実験家だけでなく、回り持ちで担当になっている理論家もおられました。年に一度は

懇親会もあった様に記憶しています。理論家を含め様々な分野の人と交流できたことは楽しい思い出です。今に比べて、ゆとりがあったのだろうと思います。

理学部に入学してずっと理学分野に身を置いて研究と教育を行い、昨年3月に筑波大学を定年退職となったわけですが、だんだん興味(だけ)に基づく自由な研究に対する風当たりが強くなってきたように思います。学術会議のあり方についての今般の動きもこうした傾向の延長線上にある様に感じます。「〇〇に役立ちそうです」とうそぶきながら自由に研究を続ける才人もいるものの、真剣に「訳に立たない研究ではだめだ」と思っている大先生がいたりして、滅入ってしまいます。多くの先輩達の「私は良いときに退職することになりました」という言葉に深く共感しながらも、それだけではいけないのだと感じています。低温部門のように研究の内容に直接は縛られない組織が、研究インフラとしてのみならず、様々な分野の研究者をつなぐ拠点として、また低温センターだよりが分野横断的な好奇心を喚起する具体的な媒体として、発展を続けることを期待しています。

巻頭言

アカデミックサロンとしての低温センターだより

徂徠道夫

低温センターだより 123, 1(2003)の表題と
徂徠先生の直筆サイン。